

第8章 万人は一人のために

日本人の胃の中への食事が少なり、心のなかの自由が少なくなったことで、侍精神を身に付けることで補われた。通常の生活が封建時代まで後退した一方で、同時に思考の基準も一緒に後退し、荒削りで、力強い新たなナショナリズムをもたらした。これにはヒトラー・ブランドも匹敵しなかっただろう。日本人は常にナショナリズムの民族だったわけではなかつたし、彼らは天国の祖先によって支配されているのだと、常に考えていたわけでもなかつた。しかし、1867年 の革命後は、封建時代の領土が中心集権的な国家として統合され、新たな国家が誕生した。この新たな国家では軍国主義者が、彼らの争いの神である、八幡の火に息を吹きかけた。しばらくの間は民主主義の影響による、この炎の鎮圧が試みられた、軍国主義者はこの火を守り、炎をこれまで以上に拡大し、外国要因は燃やされ、壊され撤退された。

軍閥は日露戦争では高々と、満州への侵略では弱めに、ナショナリズムを扇動することでは成功したが、最後の中国での冒険への活発な支持を確保することにはあまり成功していなかつた。日本国民は既に重要な事実を知っていた。それは、戦争には出費がかかり、さらに戦争を拡大すれば、さらに出費が増加することだった。満州征服によって獲得したものは期待していたほどではなく、この新たな「国」は助けになるのではなく、重荷になっていた。なぜならば、この新たな「国」を支配している軍国主義者が日本から多くの資金と資材を引き出し、アジア大陸征服のための武器庫を作ろうとしていたからである。軍国主義者が次の一步である、中国北部の征服を実行した時、母国にいる国民は彼らの後方の一歩よりもさらに後ろにいることを軍国主義者は知った。しかし、日本陸軍の根本原理の一つは決して撤退しないことだった。こうして、数年間、堂々巡りで前進している一方で、日本の父と母は子供が兵士として、この前進する行動に追行しているのと同じように、混乱していた。彼らはどうすれば終わるのかを見つけ出すことでも混乱していた。彼らはあまりにも日本本土での個人的な問題に巻き込まれ、中国での戦争については殆ど忘れていた。これらの個人の問題は大きな国家の問題と繋がっており、軍国主義者がこれを無視することは難しかつた。士気は碎かれ、カーキ色を着た征服者への信頼は全面的に消失した。

陸軍は絶好のチャンスの時に、国内での士気が最低であることに非常に残念だと思っていた。フランス陥落と軍国主義者のアジア征服決断に続いて、国外と同じように国内でも断固たる、思い切った行動が必要だった。陸にいる陸軍は、海にいる海軍よりも国民の近くにいて、混乱した国内の前線を矯正する立場にあった。政党と労働組合を解散させ、国会を、軍国主義者が莫大な予算を請求すると、喝采を送る奴隸のような機関に変え、国民の予算を必要最低限になるまで制限して、戦争経済に組織化したが、これらだけでは不十分だった。これらの方策によって反対勢力を一掃し、国家の資材と労働力を全て戦争に向かわせることが

出来たが、困惑と独裁者達への不安、疑惑、不信を取り除くことは出来なかった。また、独裁者は、統一国家を安心させて、その運命を、軍国主義者が勝つか負けるかの無謀な賭けに投入させることもできなかった。そのためには日本人に大量な中世の精神を注入することで麻痺する必要があった。このことによって彼らの心は神々と征服の新しい夢で燃え立った。呑兵衛を酔わせて、痛々しい現実から脱出させるように、この宗教的な興奮剤によって、日本人の国民精神を覚醒させ、日本人は三年間の日中戦争での極度の疲労から脱出し、太平洋の向こう側の世界に君臨する巨大国家である、アメリカ合衆国を軽蔑的に凝視するようになった。

軍国主義者が国家精神のために煎じた処方箋は新しいものではなかった。数百年前から、日本戦士によって多くの出来事で使われ、特に明治「維新」では顕著だった。この処方箋では以下の主要素から成り立っていた。(一) 日本は神からの神聖な国家であり、この神の曾祖父は天照大神の命令によって天から降りてきた。(二) 神道と呼ばれている宗教が神話を正当化し、この神話に命を吹き込んで、命のない神や先祖に命を与え、帝国の神聖な建国者の直系の子孫の男が宗教の主神父(祭祀)であり、天皇と呼ばれ、国王でもある。(三) 中世の生活基準では自由な国や自由な民衆は存在せず、彼らは神の国の神聖臣民であり、神のために奉仕し、従うために生まれてきた。

この薬はこの薬が投与された日本人の体系の中に、歴史的に最古から存在していたが、時間が過ぎるとその力が失われ、神道と祭祀の武装守護者である軍閥は様々な新たな量と間隔で投与する必要があった。1940年7月のフランス陥落後、新たな量で投与する時期となつた。「大東亜」征服の計画は出来ていたが、人々は既に陸軍への希望と信頼を失っていた。軍国主義者の報道官である近衛公爵は皇民に「建国の気高い精神(肇國の大精神の基)」と、神武天皇による神聖な命令である「世界の八隅を一つの屋根の下に(八紘(あめのした)を掩(おお)ひて宇(いえ)にせむ)」を思い出させた。彼は神の使命を達成するために、皇民に「自分本位の考え方と、物質主義的な考え方」を捨てることを勧めた。

中国とのとき以上に大きな戦争のために息子を捧げることを拒否することは「自分本位」とされた。労働と金銭を捧げることに反対することは「物質主義」とされた。それだけではなかった。近衛が言っている神聖な命令は皇民が従うものであり、議論するものではなかった。従うことが出来なかったらそれは彼らの先祖と彼らの宗教だけではなく、金色の鷹の杖を持ち髭を生やし、2602年前に登場した、日本の最初の神である天皇である神武天皇への罪を犯していることになった。さらに、1940年に臣民に「協和と協調で勤め、我々の先祖の神聖な魂に応えられるように国威を明らかにする」(**)ことを命じた、神武天皇の直系の子孫である裕仁の意志を侵害する罪を犯したことにもなつた。忠実皇民の責務は明確だった。

それは軍閥による巨大な軍事的冒険のためへの要求をすべて受け入れ、一緒に天皇の巨大な栄光のために「協調して勤める」ことであった。

(**紀元二千六百年式典ニ方リ賜ハリタル勅語（昭和 15 年 11 月 10 日）

茲ニ紀元二千六百年ニ膺リ百僚衆庶相會シ之レカ慶祝ノ典ヲ舉ケ以テ肇國ノ精神ヲ昂揚セントスルハ朕深ク焉レヲ嘉尙ス

今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カルル所ナリ

爾臣民其レ克ク嚮ニ降タシ、宣諭ノ趣旨ヲ體シ我カ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ)

現代の侍のバイブルである「臣民の道」が真珠湾攻撃の数か月前に東京で発行され、日本人に彼らの責務を説明する小冊子として提供された。それは国民に、国民の存在意味は、彼らの偉大な父であり、天皇であり、国家の家族の長のために命を捧げることにしかないことを告げた。1941 年の夏、終わりのない日中戦争が 5 年目になり、疲れ果てた日本人に「我々の生活は天皇と国に捧げることによって誠実で真実な生活となる (**我等の生活はすべて天皇に歸一し奉り、國家に奉仕することによって眞實の生活となる {二、国民生活})。」と告げられた。「天皇の下で全てが一致しなければならず、」全てが、各々崇めている先祖が行ったように喜んで国のために捧げなければならない。(**我等皇國臣民は、悠久なる肇國の古へより永遠に皇運扶翼の大任を負ふものである。この身この心は天皇に仕へまつるを以つて本分とする。我等の祖先も同じ本分に生き、その生命を我等に傳へたのであつて、我等の生命は我がものにして我がものにあらずといはねばならぬ。)

氏族への忠実、従順と従属という太古の原則を復活させることで、軍国主義者は皇民の精神を先祖の封建時代の世界の状態に戻し、軍国主義者の目的への反対を全て粉砕し、帝国と神聖な天皇のために奉仕するというスローガンの基で、統一国家に装具を付けてそれを彼らの戦闘用馬車にすることに成功した。彼らに最も必要だったのは、日本の三位一体のうち、精神的な位格であり、これが非常に助けになった。殺害、革命には関与していない、神でもある裕仁がやってきて、混乱し、苦悩している国家を統一したこと、彼の戦士を救ってくれた。天皇の下での軍国主義者の独裁政権はこれまで以上に強化され、ヒトラーとムッソリーニ以上に強固な守りを敷いた。

神と靈魂の世界に戻って来たことで、日本人は神道の浄化の儀式を受けることを求められた。彼らの魂は外国からの思想と生活様式によって冒されていた。彼らは思想と宗教の自由についてはある程度、学んでいたが、その考えを受け入れようとするとは神聖への冒瀆だとされた。彼らは政府に疑問を感じ、当惑し始めた。彼らは既に民主主義と平等などの思想

についてまさに議論していた。彼らは外国の食べ物、衣服、スポーツと娯楽による楽しみを知り、一部の日本の少女は外国人男性が好きになり、埠頭に集まり、純粋な称賛で彼らを眺め、下船するときにはサインを求めて彼らに殺到した。あらゆる年齢の少女、特に遊女はこれまで行ったことのない世界にほんの少しの瞬間でも逃れ、自由になれることを切望していた。アメリカ雑誌を熟読し、それに掲載されていた高価な衣服を着て、高級な車に乗る女性を称賛し、アメリカの女性は男性と全く同じ自由と権利を持っていることを知った。婦人は避妊の方法を学び、それを実践した。

侍は眉をひそめた。男女が西洋のスーツやドレスを着て「利己的と物質主義的な考え方」を持つようになることで、彼らの先祖の封建時代の先祖の世界が消滅し、出生率が減少しているのを見た。武士はバイブルに書かれている「祖先が後世に残した高潔な習慣と風習」を傷つけた邪悪な道を国から一掃することを決めた。これらは「贅沢三昧な民主主義」によって罹っており、軍国主義者は、米国人と英国人を、あたかも、純真な子供を悪に誘う多くの魔女かのようにとらえ、それに対峙した。

19世紀に軍国主義者が報復を誘発するために民主主義の船を攻撃し、日本人のナショナリズムに火を付けることになったのとちょうど同じように、20世紀に砲艦「パナイ」と砲艦「レディバード」を攻撃し、天津で英国人の衣服を脱がせ、その後、他の人々を東京で逮捕した。封建制度の日本の將軍がキリスト教の伝道者を逮捕し、その後追放したように、その子孫は現代の日本で同じ行動を繰り返した。日本での健康と教育改善のためにアメリカ人から何千ドルの寄付を確保してやって来た伝道者が、突然、宗教のマントに変装したスパイだと汚名を着せられた。軍国主義者が宗教の自由を規定している帝国憲法の条項を破棄することで、伝道者は様々な宗教施設での地位から追われた。官制の基督教連盟が設立され、日本人のキリスト教徒の「自立」を保証し、大英國と米国への「依存」から解放させた。教会は民主主義から経済的支援を受けることが禁じられ、伝道師は彼らの奉仕は既に必要ではなくになっていると、日本を去るよう密かに勧告された。満州国、占領中国と南太平洋地域にある様々な宗派は「統一」された。こうなったとしても、キリスト教を「精神的に日本化」することが出来るかには疑問が残った。侍はキリストの平和主義の教えを嫌っていた。平和主義は彼らの外国を征服する神聖な使命の妨げになると感じていた。救世軍も同じように、救世軍の日本人のトップが逮捕され、彼がイギリスの救世軍の本部を通じて活動しているイギリスのスパイ行為の集団の諜報員だと告訴され、解散された。彼はまた、キリストが天皇よりも優れていると説教し、そのことで日中戦争の努力に損害を起したとして、不敬罪としても告訴された。

民主主義諸国の宗教を弾圧した後、日本のナショナリストは軍閥と緊密に連携して先祖か

らの太古の狂信的宗教を世に広め始めた。藤沢親雄は国會議員で、かつてのように神道を再び国教にすることを提案し、軍国主義者は、全日本人にとって、神道を自主的ではなく、公式に信仰するよう強制しようとしていた。彼はキリスト教、仏教、イスラム教を「民衆宗教」に分類し、これらには、神道以外に、片手間に興味を持っても良いことにして勧めた。この問題を追及しすぎれば、あからさまに明治憲法に違憲することになってしまう。こうしてナショナリストは外国宗教を弱体化し、それらを「日本化」して、侍のバイブルに従わせた。

日本人に先祖の神々の宗教的な行事を教えるために、太古の神道の儀式が復活された。大政翼賛会副総裁の柳川平助陸軍中将と超ナショナリストで前拓務大臣の小磯国昭陸軍大将が50人の忠実な皇民を率いて箱根の須雲川の氷水で浄化の修行に出かけた。「朝4:30に起きて、先祖の神に礼拝し、それから、ふんどしだけで、精霊を愛する人々は滝の中に飛び込んだ。深水は膝までで、そこに立ち、太古の清めの儀式で唱えた。儀式の導入である禊では手を天に向けて突き出し、「エイサ！エイサ！」と山脈をこだました。」と報道された。身にほとんど何もまとわらず、氷水に浸す様子を、数千年前の神と同じように、川の岸から厳粛に注視していたのが神聖な皇族の閑院宮載仁親王夫妻だった。神が儀式主義者に豪雨で答え、上からも下からもびしょ濡れになった小磯大将は記者に「禊の目的は全てが無になる段階に至ることであるが、私はまだその段階までには到達していないと思う。」と語った。他の熱中している人はこの川の儀式で「素晴らしい力によって、人々の毎日の苦を全て忘れてくれ、人々の心は川水の水晶の様に澄み切った。」と述べた。彼らが行った五日間の儀式のおかげで、彼らの心が無に到達したこと、ここが、修養団の拠点となった。

無に帰す運動の熱心な支持者は、柳川の政治的賛同者であった平沼男爵で、彼は無窮会を組織し、古代日本の神々の顕著な原始的慣習のいくつかを発掘した。平沼は「儀式を詳細に研究し、それを一般行政業務や国民の日常生活に適用させることを検討すべきである」と述べた。

日常生活においては、神道はあらゆる形態の肉体的快楽と娯楽を放棄することを求めた。ナショナリストはアメリカ映画、ジャズの歌手、バンド、レコード、レッグショー、社交ダンスなどの外国の悪習を排除する行動に着手した。ハリウッド映画は数千人の日本人ファンを獲得していたが、政府によって実質的に輸入が禁止された。その代わりに、聖なる日中戦争での日本兵士のニュース映画やナチスによる映画「西側での勝利（Victory in the West）」を見るのが映画好きにとって、新たな生活の一部となった。プロパガンダの映画を当局が「鋼鉄の弾丸のように重要」であるとアナウンスしていた。劇場とダンスホールは閉鎖された。ホステスの新たな仕事場が売春宿か喫茶店になった。日本の中将や大将が最新型のアメリカ

爆撃機に飛びつくように、若者が野球に飛びついていたが、外国のスポーツだとして糾弾された。再び日本の伝統的なスポーツである相撲が奨励された。相撲とは太っているほど相手から押されて地面に落ちにくくなるため優位になるスポーツだ。

外国に関するものは全てがタブーになり、それらには店や公共の標識で使われる英語も含まれていた。「自由主義」の時代には、外国人が日本の鉄道事業建設を支援し、駅名には日本語と、それに相当する英語名が掲示されてあった。これらは今や、解体されているか隠されている。日本とアメリカの間の主要な港湾都市である横浜の鉄道駅の「横浜」という文字は、長い白紙で隠されていた。政府機関のジャパン・ツーリスト・ビューローは多くのアメリカ人が帰国後に日本を称賛するよう手助けしていたが、日本で使用していた英語名を中止し、日本名の「東亜旅行社」に変更した。この名称は国家の新たな旅程を示していた。英語使用についての反感から、ナショナリストのグループは石井康政府報道官に外国人特派員への記者会見で英語使用を中止することを申し立てた。石井は外交的譲歩として、日本語で会見を開催して、録音カメラで撮影した後に、スクリーンで再生することで、これらのナショナリストの熱意を冷まそうとした。公的で英語を使用した日本人は、彼らによって、不審人物で、外国人に雇われたスパイの可能性があるとマークされた。前駐仏大使の沢田廉三の夫人が夏の帰省で列車の中で友達と英語で会話していると、私服警察官から呼び止められ、彼女が会話したことと列車での旅行目的をくどくどと厳しく追及された。

ナショナリストの行動には滑稽な面もあった。彼らによって標識から英単語が取り除かれている間に、奇妙な国會議員が政府に政府独自の日本語のローマ字表記を採用するように促した。今までの表記が反対された理由としては、それがアメリカ人の医師で伝道師として日本に多くの貢献をもたらした J.C. ハープバーン氏によって考案されたこと以外にはなさそうだった。新たな公式表記では「chi」の音がする場合はアルファベットでは「ti」と表記することになり、これが義務付けられたことで、日本郵船は同社の最高級の船の一つである秩父丸のスペルを Chichibu Maru から Titibu Maru に変更した。この新たなスペルの結果、アメリカ人がアメリカ発、或いはアメリカ着の船に乗船する場合、その船の名前が印刷されても理解できず、乗船できなくなっただけではなく、重大な娛樂が起こった。天皇の弟の秩父宮は、彼の名前から船が命名されていたが、英語を良く理解していて、新たなスペルには非常に不快を感じていた。彼はこの新たなスペルの変更を要求していたことで知られていた。日本郵船は厳しい状況から考えを絞り出し、船名を鎌倉丸 (Kamakura Maru) に変更した。Kamakura Maru ではスペルは以前のアメリカ表示でも新たなナショナリズム表示でも同じだった。

日本人を外国人や外国人の習慣からさらに遠ざけるために、陸軍は反スパイ・キャンペーン

を開始した。このことで、多くのイギリス人が逮捕され、ロイターの特派員が死亡するに至った。日本人は外国人との関係を断つように熱心に忠告され、喫茶店の店員や芸者には白人の客がいる時は自分の言葉に気をつけるようにと警告された。列車の乗客には「重要な情報が望ましくない人物に聞かれる可能性があり、」見知らぬ人との会話を控えることが通知された。鉄道省は乗客にアナウンスで、鉱山や工場で行われている鉱物や製品について言及する事は禁止されていることを通知した。また、乗客は、列車が橋やトンネルを通過するときの経過時間を調べて、その距離を測定するようなことはしないよう忠告された。

日本人から数少ない楽しみと外国の友人を奪い、彼らの心に太古の先祖の多神教の儀式で満たしたこと、軍閥は日本人にカーキ色のユニフォームを着させ、民間兵士を組織化し、国内での前線で従事させた。大政翼賛会は国家の経済を統制することに完全に失敗し、経済統制は軍国主義者と協定を結んだ財閥に任せられ、政治分野でも成功せず、政治は現在の清算状態に陥っている一方で、軍閥とナショナリストの支持者には戦争を大太鼓で打ちたたかせ、戦争計画のために男、女、子供を統制するにはうってつけの手段を提供した。こうして、「生活での正義の実践」を新スローガンとして「全体主義による生活の新設計」の動きが全国で起こった。全ての参加者には米、牛乳、野菜と他の必需品は闇取引なしでは十分に確保することができなかつたが、改心して闇取引を止め、「国家最低予算」でやりくりする方法を身に付けることが期待された。彼らはお金を生活に使用するよりも、どうやってそれを蓄え、それを軍国主義者によって他の目的で使用してもらうかを教えられた。

月の最初の日は「新しいアジアの日」と呼ばれ、この日は全国民が、政府を助け、隣接するアジア民族を征服するという使命を達成させるために、全国民に厳しい義務と恩義があることを真剣に考えることが求められ、楽しくはない休日だった。人々の国家に奉仕することで不安を和らげるために、警察は易者にお客には悲観的な話をするのはやめ、楽しい話をするように指導した。父親や母親は子供と再会できるのかを聞くために易者に集まるようになっていた。易者は、間違えることがないよう、多くは再会は無いと答えていた。しかし、警察からの忠告を受けてからは、再会できると答えるようになった。

大東亜侵攻のために陸軍に徴用された男性の数が急増したことで深刻な人手不足が生じたため、労働者は農場や軍需産業への勤労奉仕に動員された。東京の要衝では、毎月3回の定休日を含め、労働者の余暇を軍需工場で過ごすよう労働者を説得する役人が密かに動員された。横浜では、バーやカフェで働く少女たちからなる勤労奉仕隊が組織され、大阪警察は、カフェで働く10万人の少女たちに「不規則で不健康な生活」を捨て、出身地の農村地域に戻り、田んぼで転げ回るという、より健康的な楽しみ事をすることを促す運動を開始した。

生徒は、その思想が政府が管轄する学校で既に厳格に統制されており、卒業後は陸軍に入り、

海外の戦場で奉仕することになるが、卒業前には編成され強制労働と防衛部隊に入り、地元の軍閥に奉仕した。彼らは毎日、陸軍将官の指導の下で、飛行機、グライダー、大砲、戦車、装甲車、小型ライフル銃の軍事練習を受けた後は、街路に出て防空演習を行っていた。英語を勉強する流行は衰退し、多くの時間が戦争の勉強に使われるようになった。私は休み時間に、帝国ホテルと同盟ビルとの途中にある小学校の校庭で、小学生が陸軍将官から銃剣で麦藁人形を突くのに最も有効な方法を教えてもらっているのをしばしば見た。民主主義諸国への攻撃が起こる間近の10月、陸軍は大学最終学年の学生を多くの重要な任務に当てるために、大学に直ぐに卒業させるように指示した。それ以外の学年の学生は、国内の兵器に対応できるように、学期が三ヶ月間短縮された。

息子や夫、兄弟と同じように、女性も自国で陸軍の機械の中に組み込まれていた。彼女たちも、戦争に準備するために厳しい任務を果たすために外国の習慣を捨てるよう指導され、髪のパーマやカールは不適切だと考えられた。アメリカ生まれの日本人の娘がいつものフロントに5本、バックに15本をやりに美容院に行くと、ある日、公的に本数は決まっていると忠告された。許されたのは最大限で3本になっており、彼女にはフロントに1本、バックに2本を勧められた。衣服が高価そうだったり、口紅と顔紅があまりにも目立ったりする女性は、東京の街路で愛国心の強い婦人に止められ、あなたには愛国心が欠けており、緊急事態であるのに、真剣さが足りないと非難が書かれたパンフレットが渡された。

侍の心を持った父は国家の娘は家にいて、将来、彼らが築き上げてきた偉大な天皇陛下が征服者と支配者になった時の世代になる子供を至急産まなければならないと考えていた。人材が戦場に消失することで、労働者が人不足になっただけではなく、赤ん坊も少なくなっていた。死亡率が上昇している一方で、出生率は1000人当たり13人から10人以下に減少した。国會議員たちが中国とソビエトでの出生率が上昇していることを不安そうに指摘した。彼らは出生率の減少と同じように気になっていたのが、精神疾患者が死亡率と共に増加していることだった。1926年では精神障害者が6万人だったのに対して、1938年には9万人に増加した。そこで、国民優生法が制定され、強制的に精神障害者は不妊手術が行われたが、同時に、非合法な避妊が行われた。女性は「壳春」に従事することはもはや許されないことが告知された。こうして、国会は銃を生産するためにお金をえただけではなく、それを使用する侍を供給するための援助にも使われた。

日本政府は満州事変の時、日本は人口過剰になっており、「拡大しなければ、爆発するしかない」と悲惨な話をしながら多くのアメリカ人の優しい心をつかむことに成功し、次に日本の人口が1億人まで増加する10年計画を開始した。この拡大計画は軍国主義者が八方向を

征服する計画と同様、壮大なもので、そのためには日本の母親は毎年 300 万人の赤ん坊を産む必要がある事を意味し、それは現在の出生率の約 6 倍に相当する。女性でなければこの驚異的かつ愛国的の計画を容認するだろうが、適応女性全員に奉仕することが強要された。

「赤ちゃんを持つのは楽しい」と東条英機大将の妻の東条勝子が語った。東条英機は日本の陸軍の三大独裁者の一人で赤ん坊が成長したあとの取り扱いの経験は上手かった。報道によると、彼女と大将には子供 7 歳と二人の孫がいるという。東条夫人は実際に、大家族に十分な米を与えるのは殆どできなかつたが、実際の兵士の妻と同じように、「黙って困難に耐える」ことを学んだと語った。そして、実際の兵士の妻と同じように、もてあそぶ時間はなかった。「これまでの 20 年、夜店で買い物をしたり、劇場に行こうと思つたりすることは一回もなかつた」と、政府の統制を引き継ぎ、民主主義諸国に対して攻撃した連れ合いの男が彼女のことを自慢した。彼女は自宅では触発されて偉大な父よりも巨大で優れた攻撃に着手することになるであろう子供の世話を忙しかつた。

東条夫人による報道宣伝の支援で、政府は若い女性に結婚して多くの子供を産ませることを奨励することを開始した。若い女性を結婚に結び付ける様々な誘因が提供され、多くの子を産んだ者には多くの恩恵を与えた。健康なカップルを結びつけるための公的機関が全国に設立された。ある町では、自分ではお金がなくては花入り衣装も結婚式の正装が買えず、一緒になることが出来ない者には花嫁の嫁入り衣装と花婿の正装を無料で貸し出された。政府は民間企業に職員で子供が生まれたら、国家の新たな皇民が生まれたことに対して特別ボーナスを授与するよう指示した。子供が十人以上生まれると高等教育は無料となつた。

しかし、自分の娘にまで伸びたこの誘惑を嫌がる女性もいた。彼女たちは、対象の妻で、兵士の訓練を受けた人とは違い、出生率を 6 倍にする公的な奨励では子供が成長すればそれぞれの収入は下がり、大家族は極めて貧窮することを予見していた。奮闘の後、封建的な家の抑圧から逃げることに成功した日本女性もいた。封建的な家の主たる機能は独裁的な権力者のために、子孫を戦争か稻田のために捧げることだった。彼女たちは戦士が支配する政府によって、彼女たちが中世の家まで戻されることに怖れていた。数百年前の暗黒時代に戻り、先祖の神が氷のように冷たい流れに入り込み、エイサー、エイサーと叫ぶ国家になることに恐れを感じるのはもっともである。